

市民と市長との対話集会会議録【要旨】

※生成 AI による要約を行なっています。

令和7年2月3日 中津川市障がい児者を守る会

司会

これより市民と市長の対話集会を開始します。日頃より障がい児者のご支援にご尽力いただきありがとうございます。まずは、会長より挨拶をさせていただきます。

会長

「守る会」は東小学校から始まり、今年で53年。幼児から大人までの親さんが集まり、現在、約250人の会員がいる。障がいのある人もない人も、住み慣れた土地で安心して暮らせ、自分のまちを誇れるような中津川市にしていきたい。

市長

対話集会の公約を掲げ、今日で32回目の開催。中津川市を暮らしやすいまちにする、各テーマについて、どうすればそれがより良くなっていくか、意見交換をし、市政にも反映させていきたいと考えている。

参加者

恵那特別支援学校のPTA会長を務めていた際、全国のPTAの研修会で、障がい児家族の避難所体験を聞いたことがきっかけ。

恵那特別支援学校には、中津川市、恵那市、両地域から生徒が来ており、どういふうに対応していけばいいかなど、話ができればと思う。

参加者

東日本大震災をきっかけに、災害時の対応を考えるようになった。コロナ禍で活動が止まってしまったが、情報交換手段の確保や災害備蓄品の準備などを進めてきた。災害時に避難所に行くことは、障がいを持つ子どもにとってはとてもハードルが高く、自宅での対応も見直しが必要。一方、個人ではどうにもならないことがたくさんあり、災害時に感じる不安などについて話したい。

参加者

市内に福祉避難所がないことに不安を感じる人が多いと思う。また、地域の中で障がい児のことを知ってもらう、理解してもらう機会が少なく、避難先での生活を不安に思っていると思う。

福祉避難所の整備は難しいと思うので、1部屋でも2部屋でも、福祉避難室の

ような部屋の整備や、物資が行き届くような場所に車中泊ができるスペースの確保ができると安心につながるのではと思う。

市長

現状、中津川市には福祉避難所がないが、障がい児を含めた要配慮者の避難スペースの確保に向けた準備を進めている。

また、必要な情報共有のため、市と地域が連携する体制も作りたいと考えている。

参加者

重症心身障がい児など医療的ケアが必要な子どもは、さまざまな機器が必要で、大人の力がたくさん必要な現実直面している。

また、装置を動かす電源も必要で、機器を使用している子たちは、電源がなくなったら、命が24時間もたない。発電機の必要性も感じているが、とても高額になる。

個人ではできる限界があり、病院や行政と一緒に、力を借りながら、災害への準備を今後もっとしっかりしていきたい。

市長

まずは医療的ケア児がいることの情報共有が必要で、発電機など避難所に必要な設備の判断につながる。そういったことを含めた計画が必要。

電源の確保は命に関わる大事なところ。非常用電源を確保するための助成金もあるので、ぜひ活用していただければと思う。

参加者

普段から不安を抱えている人が違う環境になるだけでパニックになりやすいことを考慮してもらおうと、家族で安心して避難できる福祉避難所が地域にあることは大切。

市長

避難所の数も限られる中、避難所、車中泊、自宅、それらの見極めも大事だと思う。状況によっては、自宅という選択肢も大いにあり得ると考えている。

参加者

障害の有無に限らず、防災は二の次、三の次になってしまう。防災意識を高めるような啓蒙活動もしていただきたい。

市長

市民の皆さん1人1人に防災意識を高く持ってもらえるよう働きかけていかなければいけないと思っている。

参加者

災害時に情報確認ができる体制も整えていただきたい。ぜひ今日知っていただいたことを生かしていただきたいと思う。

司会

できることは自分たちで精一杯やっていこうと思っているが、協力していただけたところは協力いただきたいと思う。本日はありがとうございました。

市長

災害が起きたとき、やっておけばよかったではなく、やっておいてよかったと思えるような準備、取り組みをできればと思う。どうもありがとうございました。